

紺屋遺跡発掘調査概要・I

—透析センター建設に伴う発掘調査—

平成9年3月

熊取町教育委員会

はしがき

熊取町は古くから農業や織維産業を中心として発展してきましたが、近年は住宅開発により人口も急激に増加し、大都市近郊住宅都市へと大幅な変貌をとげてきました。

その一方で我々の祖先がこの地において営んだ生活の記録そのものである遺跡が失われつつあるという状況でもあります。そこで開発者のご理解とご協力のもと発掘調査により遺跡の記録保存に努めているところであり、併せてこの貴重な文化財を後世に伝えていくことが重要であると考えています。

今回報告する紺屋遺跡は、古墳時代から江戸時代にかけての遺物（土器など）散布地として昭和60年以来周知されていますが、今まで本格的な発掘調査は行っておらず詳細な性格等を把握するに至っておりませんでした。しかし今回の調査でその一端を窺い知れる成果を得ることが出来ましたので概要報告ではありますが、周辺地域史解明の一資料として、ひいては埋蔵文化財保護への理解と認識のために役立つことを念願し発刊するものであります。

末筆になりましたが、発掘調査及び概要報告書作成に関しましてご尽力いただきました関係者各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成9年3月

熊取町教育委員会

教育長 甲田 太三郎

例　　言

1. 本書は、熊取町教育委員会が医療法人三和会永山病院による透析センター新築工事に伴って平成8年度に実施した辯屋遺跡（KNY96-1）の発掘調査概要報告書である。
2. 調査は、熊取町教育委員会文化課文化財係水井 仁を担当者として実施した。
3. 本書における標高は、T.P.（東京湾平均潮位）を用いた。また、方位は地図以外については磁北を示すこととした。
4. 土色は、『新版 標準上色帖』第10版（小山正忠・竹原秀雄編、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財團法人日本色彩研究所色票監修 1990年度版）を用いて目視により比定した。
5. 現地調査、整理作業にあたっては下記の調査員・調査補助員の協力を得た。
尾上賢一郎、貝戸雄幸、川東士朗、桑原良治、阪口雅美、関井澄子、山本恵子
6. 本調査に関しまして、医療法人三和会永山病院には文化財保護に対する十分なご理解をいただき、全面的なご支援、ご協力をいただいた。明記して感謝の意を表します。
7. 本書の執筆・編集は水井が行った。

目 次

第1章 地理的・歴史的環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第2章 調査に至る契機と経過	4
第3章 調査成果の概要	4
第1節 基本層序	4
第2節 遺構	6
第3節 遺物	7
第4章 まとめ	8

挿図目次

第1図 熊取町の位置	1
第2図 朝屋遺跡周辺の遺跡	2
第3図 調査区位置図	3
第4図 壁面土層断面図	5
第5図 遺構平面図	6
第6図 出土遺物	7

図版目次

図版第1 調査区全景・西壁土層断面	
図版第2 遺構	
図版第3 出土遺物	
図版第4 出土遺物	

第1章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

熊取町は大阪府南部、泉南地域にあり、東部を貝塚市、西部を泉佐野市の両市に囲まれた東西約4.8km、南北約7.8kmの木の葉状を呈した面積17.19平方kmの町である。（第1図）

町の地形区は南部一帯を占める和泉山脈、中部・北部を占める丘陵地、河川沿いに分布する段丘に区分される。町域では、南から北へ向かって見出川・雨山川・住吉川が流れおり、泉佐野市を経て大阪湾に注いでいる。

今回の調査地である紺屋遺跡は、熊取町の北西部に所在し、町道紺屋長坂線に面して立地している。地形的にみると、紺屋遺跡の南東部において大井出川と和田川が合流した住吉川が、調査地の南約150mの地点を蛇行しながら流下している。その住吉川により形成された低位段丘上に位置し、標高は約27mを測る。



第1図 熊取町の位置

第2節 歴史的環境

紺屋遺跡では、これまで大規模な調査を実施していないが、本調査地の北側での発掘調査において庄内期の土器や須恵器を採取しているが遺構や包含層は検出していない。またその他小規模な下水道工事等に伴う工事立会を数ヶ所で行っているがいずれも遺構・遺物・包含層は確認していない。昭和60年以来古墳時代から江戸時代の遺物散布地として周知されてきたが、詳細な範囲・性格などは不明確と言わざるを得ない。

紺屋遺跡周辺の遺跡を見てみると（第2図）、すぐ西側に同じ住吉川流域の低位段丘上に立地する、大久保B・D・E遺跡、東側には町内最大の遺跡範囲を有する東円寺跡が所在する。

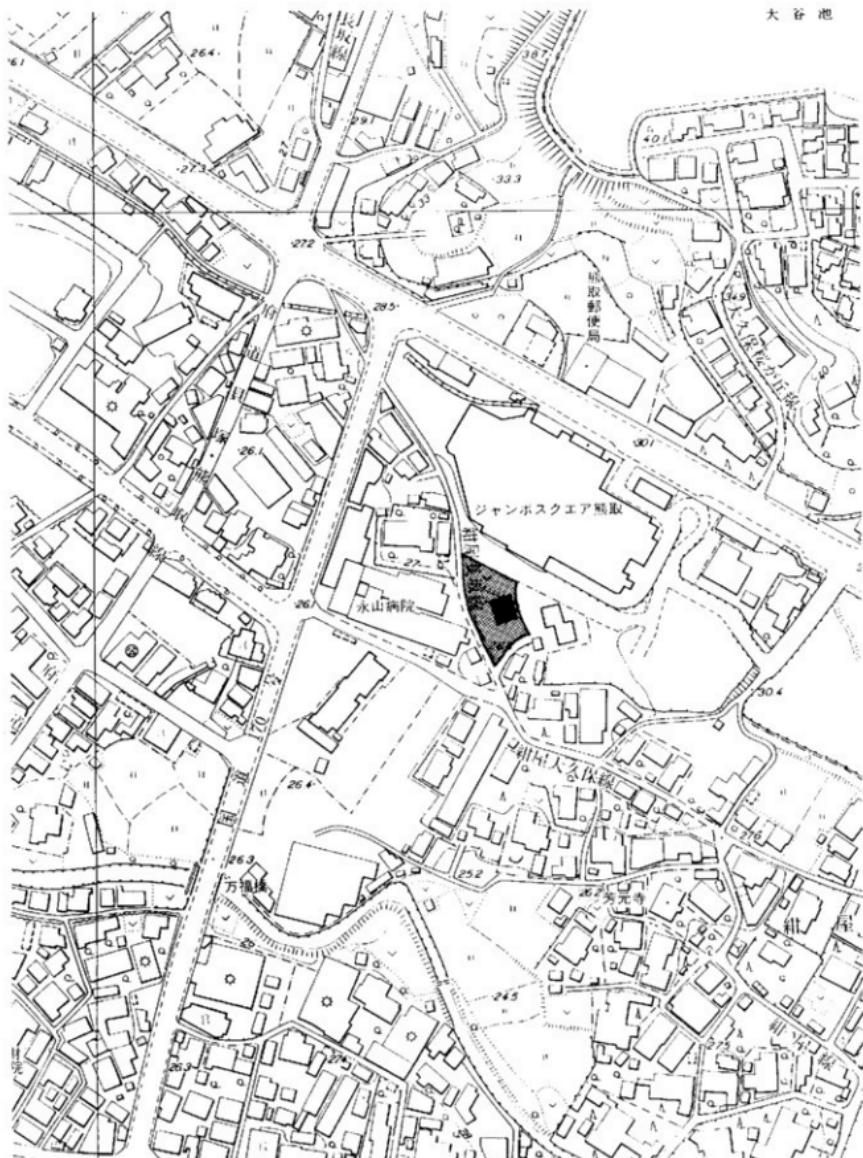
大久保B・D・E遺跡は、弥生時代末期を中心とした遺跡である。特に平成元年、2年に実施した大久保E遺跡の発掘調査では、約800m²という調査面積にもかかわらず、流路内により庄内期の弥生土器が復元し得たもので350個体以上も出土している。今後これらの遺跡の周辺に弥生時代の集落跡若しくは住居跡などの遺構が存在する可能性が極めて高いといえる。

東円寺跡では、最初に人間の痕跡が現れるのが縄文早期で、いずれも遺構に伴うものではないが無茎石錐・有舌尖頭器数点が出土している。弥生・古墳時代の遺構・遺物はほとんど検出しており、この付近はまだ開発が行われていなかった様子である。奈良時代に入ると掘立柱建物群が検出され、この頃から当地の開発が徐々に始まると考えられる。中世になると段丘上の土地利用が本格的に進むようになる。平安時代末期頃に「東円寺」が建立されると、これを中心として集落が発展を見せるようになるこ



第2図 紺屋遺跡周辺の遺跡

大谷地



第3図 調査区位置図

とか近年の発掘調査から判明している。

本遺跡周辺の低位段丘上では、縄文時代早期に遡る痕跡が認められるものの、弥生時代末期頃に開発が徐々に始まり、古墳時代には一時廃絶し、また奈良時代に入ると再開されていく様子が窺える。

第2章 調査に至る契機と経過

大阪府泉南郡熊取町大字紺屋87番地及び大久保102-1番地において、医療法人三和会永山病院理事長永山一郎氏より、透析センター新築工事に係る文化財保護法第57条に基づく届出が提出された。当該地は紺屋遺跡として周知の遺跡範囲に該当し、また隣接する地点の大久保丘遺跡、東円寺跡における発掘調査において多大な成果を挙げており、遺構・遺物の存在が十分に予想される場所であった。

このような背景のもと、本町教育委員会社会教育部文化課文化財係は平成8年5月13日にトレンチ調査を実施し、遺構・遺物・包含層などのデーターを収集した。その結果、現地表面より-60cm前後の地点で中世期の遺物を含む包含層を検出し、またその下層より奈良時代から平安時代にかけての遺物を含む溝状の遺構を検出するに至った。この成果に基づいて関係機関と協議を重ねた結果、遺構保存が難しいと思われ発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、特に遺構に影響があると思われる部分を対象に、また工事の日程等の兼ね合いで敷地の中央部300m²について実施することとなり（第3図）、平成8年5月22日より調査に着手し、次章で述べる調査成果を得て、平成8年5月30日をもって実働9日間の現地調査を終了した。引き続き文化課にて内業整理及び概報刊行作業を行い、平成9年3月に本書の刊行をもって本調査に係る作業は終了した。

第3章 調査成果の概要

第1節 基本層序（第4図）

本調査地点は、住吉川流域に形成された低位段丘上に位置し、現地表面でT.P.約27mを測る。現況は北側3分の1が畠地で、南側3分の2がアスファルト舗装の駐車場となっている。

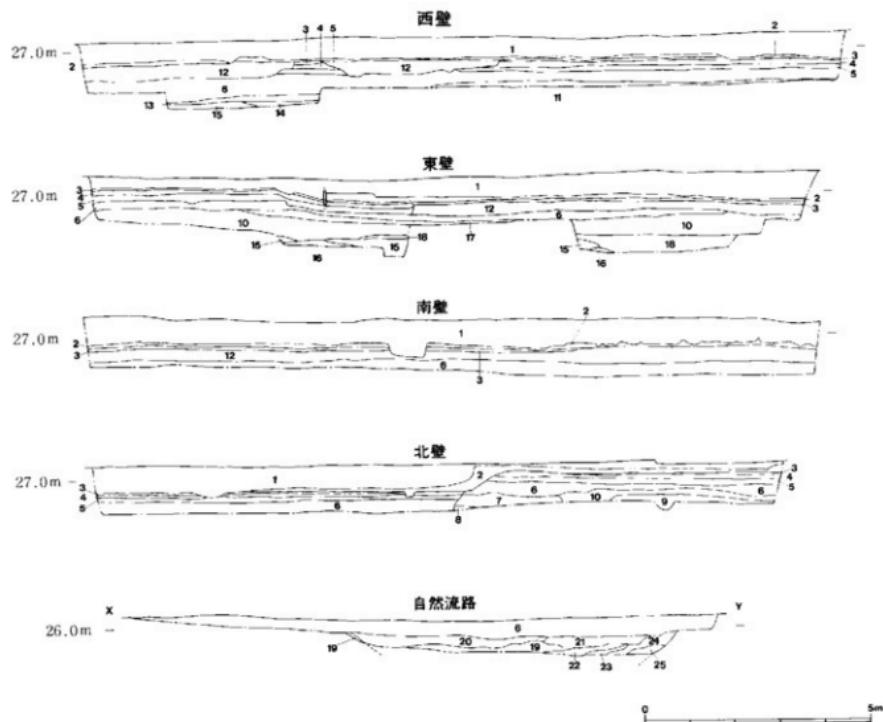
基本層序は上層より以下のとおりである。

第I層 駐車場の造成に伴う盛土層で層厚約60cmを測る。

第II層 近代まで行われていたと思われる耕作土及び床土層で、層厚は約15cmを測る。遺物は包含されていない。

第III層 主に、瓦器・土師質土器を包含する黄灰色系粘質土を呈しており、中世期の堆積層と思われる。層厚はおよそ50~80cmと多少の幅が認められる。さらに調査区の南側においては、自然流路の埋土層である、第2包含層が存在し、灰色系シルトと粗砂が不規則に堆積する。現地表面より-2m迄掘削したが、開発深度の問題や夥しい湧水量などにより地山までは検出出来ず、この層はさらに下層へ続いているようである。

第IV層 明黄褐色系粘質土の無遺物層で地山としてとらえた。地山の標高は北東部でT.P.約26.6m、南西部で約26.4mを測り、北東から南西に向かって傾斜している。



1. 7.5Y R 7/8 黄褐色	砂質土（近代底土）	14. 2.5Y 4/2 灰灰黃色	砂（流路埋土）
2. 10Y R 4/1 灰灰色	砂質土（耕作土）	15. 5Y 5/1 灰色	砂質土（流路埋土）
3. 2.5Y 6/1 黄灰色	砂質土（底土）	16. 7.5Y 5/1 灰色	砂礫土（流路埋土）
4. 2.5Y 6/1 黄灰色	7.5Y 6/6 棕色 砂質土	17. 10Y R 5/1 灰灰色	砂質土
5. 2.5Y 6/1 黄灰色	10Y R 8/6 明黄褐色 砂質土（マンガン斑あり）	18. 7.5Y 3/2 オリーブ褐色	砂質土（流路埋土）
6. 10Y R 6/1 灰灰色	砂質土（マンガン斑あり）	19. 5Y 6/1 灰色	砂（流路埋土）
7. 10Y R 6/1 明黄褐色	砂質土（埋含）	20. 2.5Y 5/1 黄灰色	シルト（流路埋土）
8. 10Y R 5/1 灰灰色	砂質土	21. 7.5Y R 4/1 灰灰色	砂混シルト（流路埋土）
9. 10Y R 5/2 明黄褐色	砂質土（地山）	22. 10Y R 5/1 灰灰色	砂混シルト（流路埋土）
10. 10Y R 5/2 灰灰褐色	砂礫土	23. 2.5Y 6/1 黄灰色	シルト（流路埋土）
11. 2.5Y 4/1 黄灰色	砂礫土	24. N 5 灰色	砂混シルト（流路埋土）
12. 7.5Y 5/1 灰色	砂質土	25. N 5 灰色	シルト（流路埋土）
13. 2.5Y 4/1 黄灰色	粗砂（流路埋土）		

第4図 壁面土層断面図

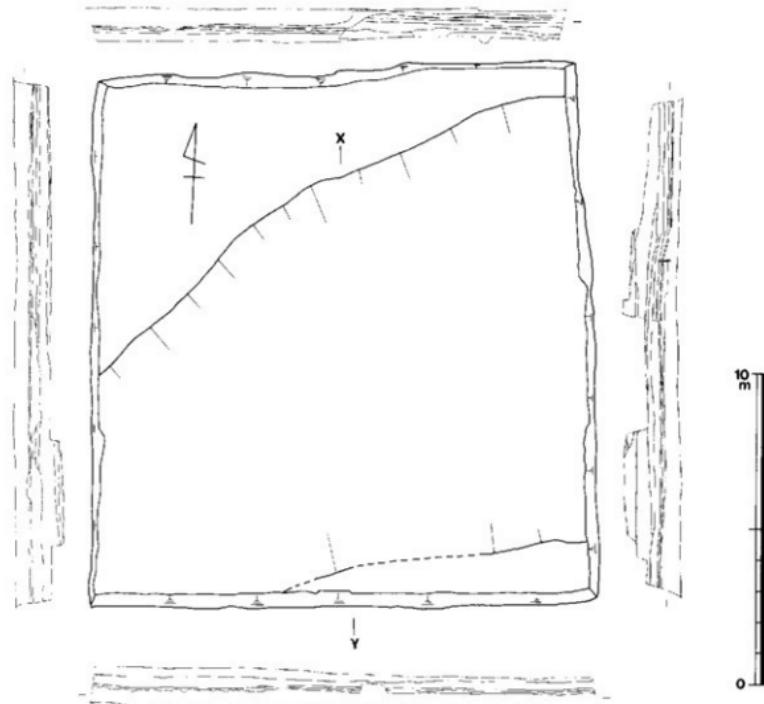
第2節 遺構（第5図）

本調査において検出した明瞭な遺構は自然流路1条のみであった。走向はN-55°E、検出最大幅は13.5m、検出長は17mを測る。流れている方向は底まで完掘していない為明らかではないが、地山の標高から推定すると北東から南西に向かって流れていたと推測できる。

埋土は上層に黄灰色系シルトが全体的に広がり、層厚はおよそ40cm程度であるが、部分的に1m以上の深さに達するところもある。それ以下は灰色粗砂、黄灰色シルトが不規則に堆積する。

なお、前章でも述べたが開発深度などの問題により地山を検出するまでには至っていない。また湧水は夥しく、一晩で地山面まで達するほどの水量であった。

出土遺物は須恵器・土師質土器・黒色土器が出上しているが、長年湿地帯に包含されていたためにかなり劣化しており、土師質土器はほとんど表面は摩滅しており、調整など詳細な観察は困難な状態である。これらの遺物から判断するとこの自然流路の存続期間は遡っても11世紀初め迄と考えられる。また埋土中に杭とも思える材木片が出土しており護岸施設が存在したとも思える。



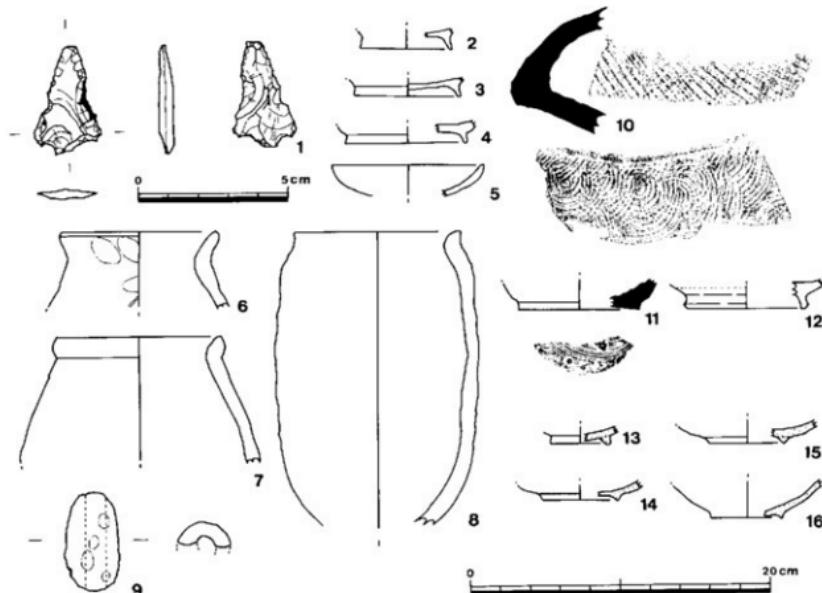
第5図 遺構平面図

第3節 遺物（第6図）

本調査において出土した遺物は、石鐵・須恵器・土師質土器・黒色土器・瓦器・灰釉陶器・瓦である。出土量は中型コンテナーに換算して1箱であった。須恵器・土師質土器・黒色土器は自然流路内より出土し、それ以外はすべて包含層よりの出土である。いずれの遺物も破片化しており、固化に耐え得るものは僅かである。

以下に個々の遺物を観察してみる。1はサヌカイト製平基有茎石鐵で、ほぼ原形を留めているが、端部は欠損している。残存長3.6cm、残存幅2.3cm、厚さ0.5cmを測る。剝離面はかなり摩滅している。他にこの時代の遺物は全く出土しておらず、他からの混入品である。2は黒色土器楕で内面のみ炭素を吸着させている。他に数点破片が出土しているが、固化できたのはこれ1点のみである。3、4は土師質楕で胎土は密である。5は土師質皿で外面に2次焼成の痕がある。6、7、8は土師質壺で粘土紐による巻き上げ成形であるが、表面調整は摩滅のため不明である。8は外面に2次焼成の痕があり、製塙土器とも思えるが、可能性に留めておく。9は土師質の土鍤である。10は底面糸切り未調整の須恵器杯の底部で、9世紀末から10世紀初頭の所産であろう。11は須恵器壺の頸部で、外斜め格子状の叩き目を施し、内面同心円の当て只痕を残す。12は灰釉陶器の高台部で、釉を刷毛塗りし、見込み・高台は露胎、高台断面三角形を呈している。10世紀代のものであろう。

13、14、15、16は瓦器破片で、高台は三角形で、やや退化が認められ、12世紀後半と比定される。



第6図 出土遺物

第4章 まとめ

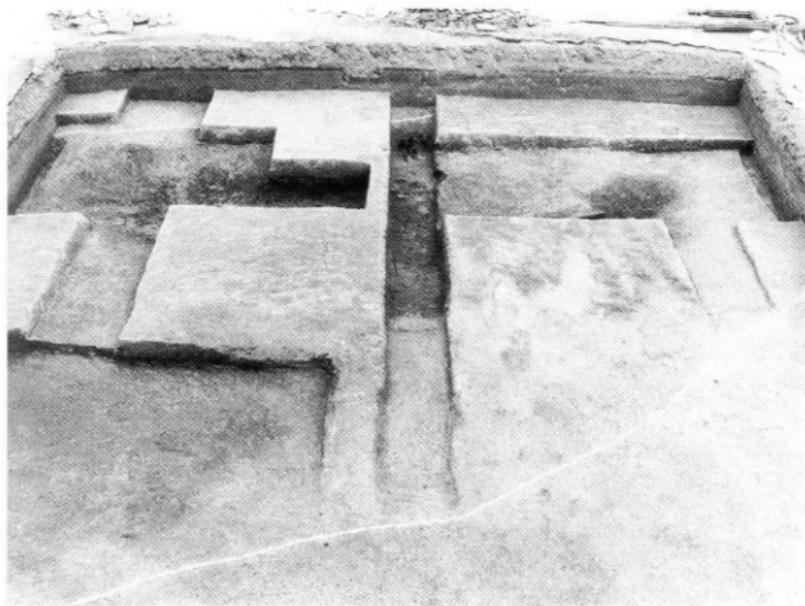
今回の調査で検出した遺構は、調査区全域を占む自然流路跡のみであり、人間の生活に直接関係する遺構は検出できなかった。しかし自然流路内より9世紀から10世紀頃の遺物が多数出土したことは、本町における初の事例であり大きな成果であった。流路内より出土した遺物は須恵器・土師質土器・黒色土器・灰釉陶器であり、平安初期から中期に限られ、埋土上層の整地層と思われる地層からは12世紀から13世紀に比定される瓦器が含まれる事から、平安期に当地周辺において開発が進んできたが、鎌倉期には完全に埋まってしまい耕地化していった事が窺える。この流路はその規模や位置から考えると、現在本遺跡の南を流れる住吉川の一部かその支流的なものであったと思われる。またこの様な自然流路は本遺跡の東側に所在する東円寺跡においてもいくつか検出しており、当時は河川整備が進んでいなかつた様子が窺える。

これらの成果や周辺の遺跡の既往の調査から当地の様相を考えると、住吉川右岸の低位段丘上の東円寺跡において奈良時代から徐々に本格的な開発が始ましていくことが明らかになってきているが、これに継続する時期の遺構・遺物は全く検出していなかった。東円寺創建期である平安末期から鎌倉初期のものさえほとんど検出していないのである。奈良期の次に現れるのが鎌倉中期以降の掘立柱建物群跡や水田遺構である。これは中世期に大規模な開発、耕地化が進んでいき、それ以前の包含層・生活面などはほとんど削平されてしまったようで、地形の低かった地点などは部分的に削平を免れ、残存しているようである。

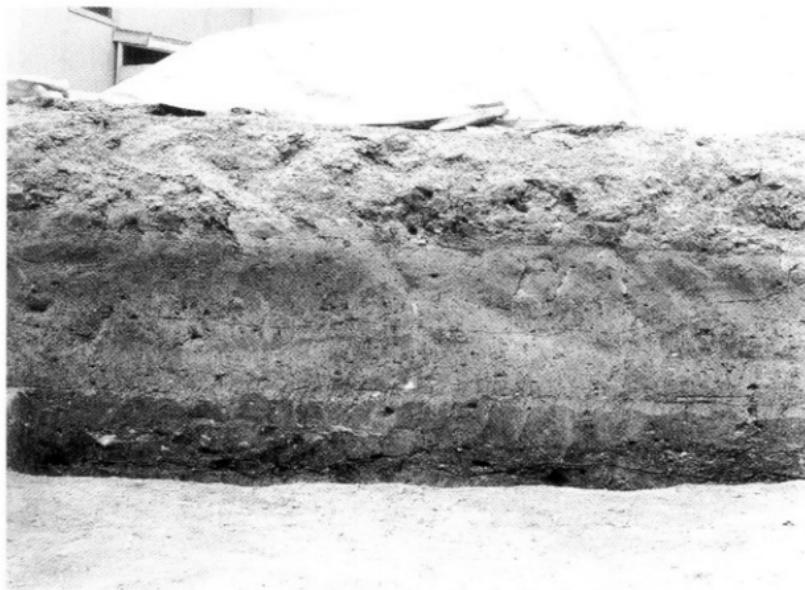
今回の調査で平安期の遺物が確認できたということは、8世紀に東円寺跡で徐々に始まった開発は平安期に入ってもより範囲を広げつつ、脈々と継続して人々の営みがあったことが明らかになったといえる。今後、更に周辺地域の調査において、奈良・平安期の生活範囲や様相を明らかにしていくことが課題といえるだろう。

図 版

図版第1 調査区全景・西壁土層断面



調査区全景（北から）



調査区西壁土層断面

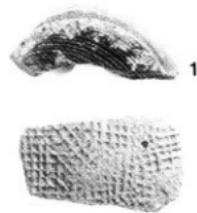


自然流路跡南北セクション



自然流路跡東西セクション

圖版第3 出土遺物



11



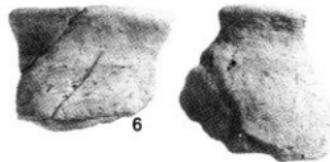
10



須惠器



8



6

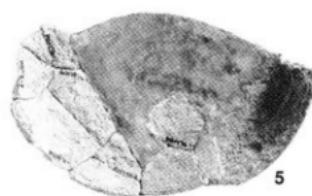
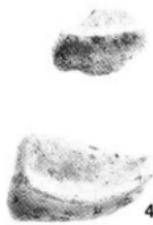


7

土師器壺

土師器壺

図版第4 出土遺物



土師質皿・椀・土錘



石鎚



灰釉陶器

瓦器椀

報告書抄録

ふりがな	こんやいせきはくつちょうさかいよう						
書名	紺屋遺跡発掘調査概要						
副書名	透析センター建設に伴う発掘調査						
卷次	I						
シリーズ名	熊取町埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	第28集						
編著者名	永井 仁						
叢書機関	熊取町教育委員会						
所在地	〒590-04 大阪府泉南郡熊取町大字野田2244番地 TEL0724(52)1001						
発行年月日	平成9年3月31日						

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
紺屋遺跡	大阪府泉南郡 熊取町大字 紺屋87 大久保107	27361	2	34°	135°	19960513~	300	透析センタ ー新築工事 に伴う緊急 発掘調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
紺屋遺跡	散布地	奈良時代	自然流路	石鏡・須恵器・土師器・ 黒色土器・灰釉陶器・瓦器椀				

熊取町埋蔵文化財調査報告第28集

紺屋遺跡発掘調査概要・I

—透析センター建設に伴う発掘調査—

発行日 平成9年3月31日

編集・発行 熊取町教育委員会
大阪府泉南郡熊取町大字野田2244番地

印刷 小笠原印刷㈱